

令和元年6月14日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K21447

研究課題名(和文) 実際のデータに基づいたあいづちの「使い分け」に関する会話分析研究

研究課題名(英文) Differences in Interactive Usage of Japanese Recipient Response Tokens

研究代表者

山本 真理 (YAMAMOTO, Mari)

関西学院大学・日本語教育センター・准教授

研究者番号：00743212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「うん」「はい」に代表される「聞き手の短い反応」を対象とし、その使い分けを明らかにするものである。これまでの日本語学・日本語教育における研究では、「うん」と「はい」の違いは基本的には「丁寧さ」が異なるものとして提示されてきた。しかしながら、話し手が自己開始修復を用いて「聞き手に向けて特別に説明を差し挟み、修復の操作が完了する」とわかる位置において、聞き手はそれまでの反応とは差異化した形で反応を示すために、「うん」と「はい」のような形式の使い分けを行っていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で得た成果は、聞き手の会話への積極的な参加の様相を示すという意味において、会話分析(Conversation Analysis)が長く蓄積してきた会話とその場の相互行為の中でやりとりを通して構築されていくものであるということを端的に示している。また、本研究が明らかにした聞き手反応の使い分けは、教室内で明示的に指導をされているとは考えにくい日本語の第二言語話者のデータにおいても確認され、学習者の相互行為能力(interactive competence)を示す一例となった。

研究成果の概要(英文)：This study highlights differences in interactive usage between "un" and "hai", two recipient response tokens available in the Japanese language. Prior research in the fields of Japanese language and Japanese language education suggests that the difference in usage between the two response tokens is merely one of politeness. However, when the actual data were analyzed in this study, when the speakers use self-initiated repair (Schegloff, Jefferson & Sacks 1977) to supplement the special information for recipients, another at the end of the repair sequence, it was observed to switch to the response token. Thus it is differentiated between the tokens on the basis of context.

研究分野：日本語教育、会話分析

キーワード：あいづち 聞き手、聴き手、受け手 自己開始修復 会話分析 インタビュー場面

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本語学・日本語教育学において、いわゆる「あいづち」については多くの研究がなされてきた(水谷 1989)。ただし、先行研究ではそのバリエーションの多さや頻度の多さに焦点が当てられることが多く、特定の形式がいつどのように用いられるかや、形式間の詳細な分析はあまり行われていなかった。例えば「うん」と「はい」の違いは基本的には「丁寧さ」のみが異なるものとして提示されるのみであった(例えば、Maynard1990、富坂 2005、グループ・ジャマシ 1998 など)。しかしながら、筆者が「日本語話し言葉コーパス(CSJ)」のインタビュー場面のデータを対象とし事例分析を行ったところ「丁寧さ」とは異なる基準で両者が使い分けられている可能性が示唆された。

### 2. 研究の目的

本研究では会話における「聞き手」が用いる「うん/はい」といった「聞き手の短い反応」がどのように使い分けられているのかを明らかにすることを目的とする。その際、従来のあいづち研究では積極的に扱われていなかった、頷きといった身体動作や「うんうんうん」「はいはいはい」などの複数回短い反応を重ねる場合についても含めて検討する。

### 3. 研究の方法

会話分析[Conversation Analysis](Schegloff 2007)の立場から、実際の会話データを用いて、聞き手が用いる短い反応がどのように使い分けられているのかを検討する。分析においては、筆者が収録したデータおよびコーパスを使用し、当該現象が含まれる箇所を用いられる反応が「なぜ・今その位置(タイミング)で[Why that now]」(Schegloff2007)発せられるのかという観点から分析する。主な分析の手順は以下の通りである。

収集したデータのうち、注目すべき現象が含まれる箇所を文字化する。文字化は会話分析のルールに則った記号システムを利用する。

現象を複数集めつつ(コレクション作成)、一つ一つのデータについて詳細に分析をする。

データセッションにて複数の研究者とデータや分析内容を検討し、分析の客観性、妥当性を高める。

### 4. 研究成果

#### (1) 収集したデータ

以下の表1に示す通り、様々な場面でデータ収録を行った。特に、刻一刻と変わりうる「話し手・聞き手」の役割が比較的明確なインタビュー場面を収集した(データ3、4、5、9、10、11、12、13)。また、日本語第二言語話者(以下、L2話者)の聞き手としての反応を記述するために、L2話者がインタビュアーとなる場面の収録も行った(データ3、4、5、11、12)。なお、データ1の観光場面のデータは、観光地の武家屋敷内をボランティアガイドが3名程度の観光客に対して簡単なガイドを行うもので、インタビューとは異なるものの、話し手・聞き手役割が明確なため収録をした。

表1 本研究期間に収集したデータ一覧

	収録日	場所	場面	人数	参加者属性	時間
データ1	2015年10月	秋田	観光	3~4人	ボランティアガイド・観光客	180分
データ2	2015年11月	東京	雑談	2人×4組	大学生同士(初対面、クラスメート)	210分
データ3	2015年12月	東京	インタビュー (日本語授業)	複数人	L2大学生 →寺の副住職	30分
データ4	2015年12月	東京	インタビュー (日本語授業)	複数人	L2大学生 →呉服屋夫婦	50分
データ5	2015年12月	東京	インタビュー	2人	L2大学生 →商店街理事長	75分
データ7	2017年2月	札幌	雑談	5人	友人同士	85分
データ8	2017年3月	福島	雑談	複数人	自立支援ホームでの利用者・運営者	120分
データ9	2017年7月	大阪	インタビュー (模擬取材)	2名	プロのライター →カメラマン	75分
データ10	2017年8月	兵庫	インタビュー (模擬取材)	2人	プロのライター →地域おこし協力隊	75分
データ11	2017年11月	秋田	インタビュー (日本事情の授業)	複数人	L2大学生 →地域住民、役所職員等	120分

データ 12	2018年1月	兵庫	インタビュー	2人×2組	L2 大学生 →L1 大学生	80分
データ 13	2018年10月	札幌	インタビュー (聞き取り調査)	2人×3組	教員 →教員	114分

以下の図の「場所」はデータ収録が行われた場所を、「参加者属性」のうち「→」があるものについては、「インタビュアー→インタビュー」の順番で記載している。

## (2) 日本語第一言語話者：「うん」「はい」の使い分け（雑誌論文①）

日本語のあいづち表現として最も一般的に使用される「うん」「はい」の使い分けの特徴について、実際のデータに基づき分析を行った。分析は予備的考察として「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」のインタビュー場面のデータを対象として行った。その結果、従来の先行研究で言われている両者の使い分け、つまり「丁寧さ」とは異なる基準での使い分けが示唆された。特に注目したのは、インタビュイー (IE、説明者) が自己開始修復 (Self-initiated repair) (Schegloff, E., Jefferson, G. & Sacks, H. 1977) を行う環境において、インタビュアー (IR、説明の聞き手) の反応が「うん」から「はい」に切り替わるという点である。

具体的な事例を見てみたい。以下は IE が研究について質問を受け、その説明をしている場面である。IE は説明の途中の 05 行目「その問題が」で発話の途切れさせ「その問題」に関する詳細な解説を始める。06 行目では「問題っていうのは～」と説明を加えていることがわかる。そして、08 行目の「え:難しい問題っていうのが」で解説部分が終了し、元の説明部に復帰することがわかる。このように説明途中で当該発話の発話者自身が発話を中断し、解説を差し挟み、元の説明に復帰するまでが「自己開始修復」である。注目したいのは、それに対する聞き手の反応である。

【断片 1】CSJ:D04M0052【問題】 IR (インタビュアー)、IE (インタビュイー)

04 IR: °うん°

05->IE: [そん中に:その:色んなね?(0.2)その問題が-(0.2)

06-> 問題っていうのはしゅ-機械が処理する上で、

07=>IR: はい

08->IE: え:難しい問題っていうのが色々あるだろうっていうこ[とで ]データを撮ったんですよ

09 IR: [°うん°]

10 °うん°

このインタビュー全体を通して聞き手となる IR は基本的には「うん」を用いて反応を示す (04、09、10 行目)。しかし、07 行目では「はい」が用いられている。これは単なる偶然ではなく、「はい」が現れる位置は、IE が発話の途中で IR の理解のためにことばの説明を挿入的に挟み自己開始修復が行われる環境と関連している。つまり、IR はこうした IE の発話の構造化を捉え、挿入的になされたことばの説明が完了することが認識可能となると「はい」による反応を行う。それによって自らに向けて IE が説明を挟んだという今ここので行われたことと、その内容を適切に理解していることの両方を主張していると考えられる。つまり、文法資源が相互行為の組織のためのリソースとなっている事例と考えられる。同様の例が CSJ の中に他に 5 件ほど観察された。

## (3) 日本語第一言語話者：その他の形式の使い分け（学会発表②）

(2)の研究成果をさらに検証するため、独自に収集した 2 人会話の雑談場面データ、日本語日常会話コーパス (CEJC) の 2 人会話を対象に自己開始修復に注目してデータを収集・分析した。また、身体的動作を含め、「うん」から「はい」に切り替わるだけでなく、「頷き→うん」「うん→うんうん」「はい→はいはい」のようなものも抽出し、詳細な分析を行った。その結果、(2)で見られたのと同様の位置において聞き手が短い反応を変化させていることがわかった。こうした聞き手の短い反応の切り替えは、話し手の発話の流れを滞らせることなくしかし確実に話し手の発話に沿って今何が行われているかを適切に理解していることを表示する手段であると考えられる。

## (4) 日本語第二言語話者：形式の使い分け（学会発表③）

日本語教育分野への応用を見据えて、日本語第二言語話者 (以下、L2 話者) が(2)と同様の環境において短い反応の使い分けを行っているのか否かについて検討した。その結果、反応の遅れや使われた形式は日本語第一言語話者 (以下、L1 話者) とは異なっているものの類似した位置で身体的動作を用いて差異化をはかったと思われる反応が見られた。ただし、差異化は「うん→はい」のように音声的に明確な形ではなく、「はい→(は/あ)い」のような微妙な音声変化と首の動きを上から下に向けて下ろしていたものを、下から(「あー」と発するときのように)下から上に向けて移動させるといった変化であった。

また、観察した L2 話者のインタビュー会話においては(「うん」ではなく)「はい」を反応の基調としており、L1 話者がフォーマルな場面においても「うん」を基調とする反応を行

い、有標な表示が必要な場合に「はい」へ切り替えることは対照的であることもわかった。これは、L2 話者が「丁寧さ」の観点からのみ「うん」「はい」の使い分けについて指導を受けており、インタビューのようなフォーマルな場面においては当然「はい」を用いるべきだと理解しているためと考えられる。この点からも「うん」「はい」の使い分けを丁寧さ以外の観点からも記述し、日本語教育の現場でも指導していく必要性があることが示された。

#### (5) 接触場面における日本語学習者の相互行為能力 (図書、学会発表)

L2 話者が日本人研究者にインタビューを行う場面におけるあいづちの使用を含めた「聞き手」としての振る舞いについて、相互行為能力 (Young 1999, Hall 1995) という観点から分析を行った。研究開始当初、いわゆるあいづちと呼ばれる「聞き手の短い反応」のみに注目していたが、分析の過程で次の三つの観点が、聞き手の反応として重要ということがわかった。三つの観点とは (1) 相手の発話の一部の繰り返し (other-repetition)、(2) 認識の変化を示すトークン (change-of-state tokens) (Heritage 1984)、(3) 相手発話の言い換え (rephrasing of an expression) である。分析では、インタビューの受け手 (インタビュイー) となる L2 話者が様々な反応の形式を用いながら、いかにインタビュアーとして適切に振舞っているのかを記述した。

同様に L2 話者の相互行為能力という観点から同一の L2 話者が適切な位置において適切な形式を用いて反応を表示する場合と、適切に反応を表示できず L1 話者が言い直すなど何らかのトラブルとして扱っている場合についても検討した。その結果、前者の場合には、話し手である L1 話者の発話と身体的動作が、L2 話者の反応を可能にする位置で明確に提示されている可能性があることがわかった。

#### <引用文献>

- グループ・ジャマシイ (1998) 日本語文型辞典、くろしお出版
- Hall, J. K. (1995). *(Re)creating our worlds with words: A sociohistorical perspective of face-to-face interaction*. *Applied Linguistics*, 16(2), 206–232.
- Heritage, J. (1984). A change of state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action* (pp. 299–345). Cambridge: Cambridge University Press.
- Maynard, Senko K. (1990) An introduction to Japanese grammar and communication strategies 日本語の文法とコミュニケーション・ストラテジー、The Japan Times.
- 水谷信子(1983)あいづちと応答、水谷修(編)、話しことばの表現 講座日本語の表現 3、pp.37-44、筑摩書房
- Schegloff, Emanuel A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*, Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A., Gail Jefferson & Harvey Sacks (1977) The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 53(2): 361–382.
- 富阪容子 (2005) なめらか日本語会話 新装版、アルク
- Young, R. (1999). Sociolinguistic approaches to SLA. *Annual Review of Applied Linguistics*, 19, 105–132.

#### 5 . 主な発表論文等

##### [雑誌論文](計1件)

山本真理、相互行為における聞き手反応としての「うん/はい」の使い分け: 「丁寧さ」とは異なる観点から、国立国語研究所論集、査読有、第10巻、2016、pp.297-313

##### [学会発表](計3件)

山本真理、インタビューにおける日本語学習者の「聞き手」としての相互行為能力(An Analysis of Interactional Competence of Second Language Learners of Japanese as an Interviewer)、査読有、日本語教育国際研究大会(ヴィネチア)、2018.8

山本真理、自己開始修復における受け手反応—「うん/うんうん」「はい/はいはい」等の使い分けに注目して—、国立国語研究所シンポジウム、「日常会話コーパス」III、査読無、口頭発表、2018.3

山本真理・柳町智治、留学生のインタビュー活動場面における"巧みな"聞き手としての参加、第10回国際 OPI シンポジウム(函館)、査読有、2015.7

##### [図書](計1件)

Mari Yamamoto & Tomoharu Yanagimachi, Co-construction of an L2 Speaker's Interactional Competence: Recipient Responses in an Interview Activity. In Tim Greer, Midori Ishida, Yumiko Tateyama(Eds.), :Pragmatics & Interaction: *Vol. 4. Interactional Competence in Japanese as an Additional Language*, Honolulu, HI University of Hawai'i, National Foreign Language Resource Center, 2017, pp.115-140

〔産業財産権〕  
出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）:

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。